デジタルが変える渋谷の教育　子どもの「心」を見える化

#東京 #関東 #ネット・IT

2023/3/24 5:00 [有料会員限定]

東京都渋谷区が開発した教育ダッシュボード。子どもの異変をいち早く察知することなどに役立っている

小中学生に配布したタブレット端末への入力情報を集約し、グラフや表にして一覧画面で表示する東京都渋谷区の「教育ダッシュボード」が注目を集めている。出欠状況や学習記録に加え、自宅でウェブ検索した言葉などを可視化することで、子どもの心の変化を素早く察知して指導に役立てている。教員の経験や勘が頼りだった従来の指導を補完するツールとしてデータの活用が進む。

渋谷区は教育ダッシュボードを独自開発して小中学校に導入し、子どもたちへの指導で成果を上げ始めている。都教育委員会も教育ダッシュボードを開発中で、2024年度から徐々に都立学校などに導入する方針。文部科学省でもダッシュボードの普及に向けた議論が進む。

子どもたちはタブレット端末を毎日持ち帰り、自宅でインターネットを利用する。児童の一人は「自殺」というキーワードで複数回検索していた。渋谷区の小学校の教員がダッシュボードを見ていて気づき、その児童とのコミュニケーションを手厚くするなど様子を注意して見守った。すると、友人との関係に悩んでいたことが分かり、関係の改善につなげられた。

渋谷区では、子どもがタブレット端末に自身の心理状態を「こころの天気」として晴れや雨など天気マークで日常的に記録している。2カ月に1回は学校が楽しいかどうかなど学校生活に関するアンケートに答える。学習記録とともに、そうした子どもたちの心境の変化をダッシュボードは見える化する。

区教委によると、「児童が表面に出さない思考が分かる」「様子がおかしいと感じる前の段階で、先手を打った指導や声掛けができる」といった声が教員から上がったという。

ダッシュボードは学級担任のほか、校長ら管理職、区教委の指導主事も閲覧できるようにしている。子どもの課題を担任だけが抱え込むのではなく、多くの目で子どもを見守ることで、いじめの問題などに迅速、的確に対応する狙いがある。

渋谷区は民間企業と連携してダッシュボードを開発し、22年9月から本格運用を始めた。民間のサービスを導入するのでなく独自に開発したことで、「現場からの要望に柔軟に対応できる仕組みになった」（区教委）。外部の事業者に発注せずに、表示するデータを区が自在に設定できるのが大きな特長だ。

文部科学省が1人1台ずつタブレット端末などを配備する「GIGAスクール構想」を打ち出したのは19年度。渋谷区は17年度には既に教育現場への端末の導入を進めていた。端末の本格活用は21年度に全国の自治体で始まったが、蓄積された教育関連データをいかに有効活用するかは共通の課題となっている。

渋谷区は今後、ケアが必要な子どもを自動で抽出して教員に知らせる機能などの拡充を図るという。現状は教員向けだが、子ども自身が不得意な学習分野を把握できるようにして勉強の仕方をサポートするような児童生徒向けダッシュボードの構築も進めていく方針だ。